



## Case-1 マヨイガアプリ

「ねえ、知ってる？ マヨイガってアプリ」

「ええ？ 何それ？」

「家に帰りにくい時とかあるじゃん。親と喧嘩しちゃったり

テストの点数悪かった時とかさ。彼氏と別れて一人で泣きたい時とか！」

「うんうん」

「このアプリをインストールすると、誰にも見つからない、

自分だけの隠れ家まで、地図で案内してくれるんだって！」

「すごっ！ 超便利じゃん！ インストールするだけでいいの？」

「うん。——でも」

「でも？」

「その隠れ家から出るには、誰かに連れ出して貰わないとダメなんだって」

「そしたら、私が出したい時言うからさ、××が迎えに来てよ！」

「もちろん！ 私が家出したい時は※※が迎えに来てね！」

『だって私たち、親友だもんね！』

二〇××年 八月二日未明、N県在住の中学生××さんの行方が解らなくなり、その数日後、友人である※※さんが同じように行方不明となりました。

二人は家庭環境に問題があり、よく二人で夜遅くまで公園に居たと多数の目撃証言が寄せられています。二人の最後の目撃証言も、この公園だったとのことでした。

二人の失踪の原因を我々テレビスタツフが調査した所、若い人々の間で“マヨイガ”と言うスマホアプリが流行つてことを突き止めました。このマヨイガアプリはインストールすると、そのアプリをインストールした人だけの隠れ家まで地図アプリで案内してくれるとのことでした。誰にも邪魔されたくない、誰とも会いたくない——そんな思いを持つティーンエイジャーから噂になつたようです。

ですが、このアプリはいわゆる“アプリストア”からはダウンロードすることができなく、ダークウェブと呼ばれる通常ではアクセスできないウェブサイトからしかダウンロード出来ないものとされ………。

## Case-1 Phase-A マモイガアプリ

あの人はいつも民俗学研究室に居る。

そしてあの人はいつも達観したように物事を解決してくれる。

——まるで、探偵のように。

だから、ぼくは最初に彼女を頼った。

「先輩！ ゆら先輩！ 助けてください！」

ぼくの所属する帝都大学 社会学部 文化人類学科 民俗学研究室。そこにはフィールドワークを日常とする教授が在籍しており——詰まり、この研究室自体に存在していることは稀なのだが——研究生である彼女がいつも居るのだった。

「オヤオヤ、ミケくん久しぶり。どうせトリイくんのことでしょう？」矢張り、彼女は達観したように微笑んでぼくを迎える。「まあま、座りたまえ。そしていつものように缶コーヒーをあげよう」

につこりと笑うゆら先輩を見て、ぼくは少しだけ安心した。

ぼくは本名を猫嶋 実希ねこじま みきと言うのだが、苗字の猫と言う漢字と、黒に明るい茶色のメッシュの髪型から、ゆら先輩はぼくのことをミキではなくミケと呼ぶ。

——ミケくんじゃなくてミキくん？ ……別にどっちでも良くない？ 猫だし、見た目も三毛つばいし、名前も読もうと思えばミケって読めるじゃない？

そうかなあ……と、思わなくないが猫派のぼくはそのあだ名が嫌いではなかった。いや、むしろ好きだ。そんな訳で、ぼくはゆら先輩にミケと呼ばれ、同級生たちにも広まつたわけだ。悪くはない、猫は可愛い。

……いやいや、閑話休題。そんな思い出を思い出している場合ではない。

研究室にはソファが置いてあり——来客用と言うよりは泊まり込みをする学生のベッド代わりのようだ——そこにいつものように座る。

ゆら先輩から渡された、冷蔵庫で冷やされた缶コーヒーを少しだけ飲む。

「トリイくんはね、いわゆる霊媒体質ってやつだから。あれでしょ？ 今流行りのマヨイガアプリ」

「そうです」

ぼくは小さくため息を吐く。大学に入って、学科は違えど仲良くなった鳥居翔——トリイと呼んでいる——は大学生にもなつて少年のようで、都市伝説や怪しいものが大好きかつその名の通り鳥頭なので、何も考えずに怪しい場所にも何にでも首を突つ込むのだ。そして民俗学研究室の研究生である彼女——九十九つくもゆら先輩曰く、霊媒体質であるらしく、非常に高い確率で何者かに出会ってしまう。

そして、懲りないのだ。何度やつても。

矢張り鳥頭、すぐ忘れてるんじゃないか？ とぼくは思うが、成績自体は悪くないと言ふ不思議な友人である。

「ミケくんは友人思いね。一応、経緯を聞いておこうか」

「はい」

そうして、ぼくはゆら先輩へと経緯を語る。

「マヨイガアプリ。アプリストアには存在しないって所から、トリイは公式ではないアプリをインストールできるサイトを色々探してみました。まあ、アイツのことなんで、ダークウェブなんて高尚な所にアクセスできないと思うんですが」

そう。トリイは勉強はできるのだが、こと怪異を含む興味のあるものに関してはその思考力がどこかへ消え失せるかの如く猪突猛進に行動するのである。

今回も、手当たり次第に検索しては手当たり次第に怪しいアプリをインストールしていた。きつと、その一つが本当にマヨイガアプリだったのだ。

「まあ、トリイくんのことだから偶々当たつちやつたんでしよう。いつもの感じで」

ぼくがゆら先輩に初めて出会った時も、トリイが怪異に出会った時であった。トリイの霊媒体質は後天的なものであり、彼が怪異を好むから怪異も彼を好むのだそうだ。

——ほら、犬が好きなのに犬って寄ってくるじゃない？

……とのことだが、ぼくには何となくしか理解できなかった。そもそも犬が好きの人に犬が寄ってくるのも本当かどうか解らないし、ゆら先輩も適当なことを言っている風ではあった。

そんな縁もあって、ぼくたちはゆら先輩に良くお世話になっていたのだった。

「はい、そうなんです。どうも、手当たり次第にインスタールしてたので、ぼくもトリイがどんなアプリをどこでインスタールしたか解らなくなつて」

ぼくがそう言うのと、ゆら先輩は「ふむ」と唸つてから問うた。

「失踪した日や状況、今までミケくんが何をしてきたのか聞かせて貰える？」

「はい」ぼくは自分を落ち着かせるようにコーヒを一口飲んでから話し始めた。「失踪したのは、恐らく昨日。数日前にトリイからマヨイガアプリつぼいものをインスタールすることができたつてメッセージアプリで連絡が来て、それについて何回かやり取りをしました。トリイはインスタールしただけではマヨイガへの道筋が現れないつて、噂とは違ふなあつて言つてました。一応ぼくも民俗学の講義を取つていたので、マヨイガ——つまり迷い家についてはまああ解つているつもりです」

「迷い」ゆら先輩は宣言するように言つた。「本来の迷い家は山中で迷つて辿り着く不思議な場所。このマヨイガアプリは、物理的ではなく精神的な迷いに対して発生している

——と考えられる」

「はい」ぼくは同意する。「なので、ぼくはトリイに言つたんです。お前、迷つてないだろつて」

家出をしたい、何処かに隠れたい、誰にも会いたくない。そう考える人たちは何かに迷つているのだ。例えば、人生とか。そう言つた精神的な迷いに対してこのアプリは反応するのだろう。

だから。

『迷えば良いんだな！』

二人の声が重なった。

「つて——言つたのが、昨日の講義で会つた時。そこからメッセーシアプリに反応がない感じですよ」

「なるほど」想像の想定内だ、とでも言うようにゆら先輩は微笑んだ。「ちなみに、私があげたお守りは、ミケくんもトリイくんもちゃんと持つてるかな？」

「それは、絶対に持つてます」

ぼくは断言した。

お守り。神道に起源を持つが、その概念や用途は時代を経て広がり、民間信仰やその他の宗教にも関連するものだ。お守りを持つだけで安心することすらある。

ゆら先輩から貰つたお守りは、一体何に効力を発揮するのは解らないが、持つだけで安心する類のものだった。だからトリイは常に身につけていた。勿論、ぼくも。

「じゃあ、どうにかなると思う」ゆら先輩は心強く、そう言つた。「ミケくんは聞き込み調査をお願い。出来るだけ、トリイくんが消えた時間と場所を絞つて。あと、マヨイガアプリについての噂も集めて欲しいな。こう言うものの類は、沢山派生が出てくると思うけれど、矛盾があつてもオーケー。怪異つてそう言うものだから。お願いできるかな？」

ぼくは「勿論ですよ」と言つて立ち上り情報を集めに外へ出ようとする。その後ろ姿に、

ゆら先輩は問う。何だか、少し冷たい声で。

「これって怪異探偵九十九ゆらへの依頼ってことで良いのよね？」

そう。怪異探偵九十九ゆら。怪異を専門とする探偵である。

その存在を知るものは一般的には少ないが、全国の民俗学研究室を持つ大学の間では知る人ぞ知る——と言うくらいは有名である。

探偵への依頼。勿論それは報酬が何かを聞かれている訳だ。彼女は特に金銭に拘りはなく、例えば大学近くのカフェでちよつとお高めのパフェを奢って欲しいとか——ぼくとしてはデートみたいで探偵への報酬と言うよりも自分へのご褒美みたいに思えるのだが——女性一人では入りにくい古書店に付き合っただけで欲しいとか、そう言っただけで可愛いものであった。だから当然のように頷く。

「はい、勿論です。お願いします」

それが、ぼくの今後の学生生活に大きな影響を及ぼすとは知らずに。

ぼくは研究室を出ると学生ラウンジへと足を運んだ。

そこには授業を待つ学生、宿題をする学生、暇を持て余した学生などなど、様々な学部の人々が存在する。その中でぼくは自分のスマホを取り出し、自分を含めた友人た

ちが多く登録しているSNSを開き、呼びかける。

@mike\_2shippo

【拡散希望】#マヨイガアプリ#マヨイガ

@penguin\_ha\_toriと連絡が付かなくなりました。どうも最近話題の

マヨイガアプリをインストールしたみたいです。小さいことでも構いません。

彼と最後にやりとりをした時間、目撃証言、そしてマヨイガアプリそのものについて教えてください。

トリーはSNSでも交友範囲が広い。彼のアカウントを引用することで、より多くの情報が集まるだろう。暫く待つと、SNSのリプライが付く通知音が次々と発せられた。

それは思惑通り、トリーをフォローしている人たちからのものも多かったし、思った以上に多くのリプライが付いた。やはりみんな、マヨイガアプリそのものが気になるのだろう。

@nagisaeiji\_lab

@mike\_2shippo ペンギン鳥が居なくなったの？ 俺とのやりとりは三日前だな…

確かに、最近マヨイガアプリについて色々調べてたけど、いつものことだと思って気にしてなかったわ…悪い。

あんまり役に立てなくてごめん…

@sakura\_milk29

@mike\_2shippo ペンギン鳥がよく使ってるオカルト掲示板なら知ってる。

ミケシッポも知ってるかもしれないけど。あとでDMするよ。

確かそこでも最近マヨイガアプリの話盛り上がってたな…。

@sunday\_kuma

@mike\_2shippo 確かに、あいつ毎日のように何か投稿してるのに

一昨日くらいから何も投稿ないね…心配だな…。

続々とトリイを心配するリプライが飛んでくる。そのリプライに一つずつ返信をしながら、ぼくは有用な情報を探す。本当にネットの繋がりと言うのはありがたい。短時間で山の情報を多くの人から貰うことができる。

矢張り、昨日の講義終了後——十五時以降からトリイとやりとりをした人はいないらしい。よくアクセスしていると言うオカルト掲示板にも、昨日の十五時以降は現れていないようだ。

リプライを読んでいると、DMも幾つか来ていることに気づいた。一つはオカルト掲示板のURLを送ってくれた知り合いだろう。その他のDMも開ける。

メッセージアプリでもいいと思うけど、話題にしているからこっちで。

トリイ、昨日の夕方に見たよ。大学の近くに生物学部所有の小さな森？ 山？ あるじゃ

ない。あそこに向かってくの見た。

あそこにあるお地藏さんとか道祖神とかに興味あるのかなって思って特に声は掛けなかったけど…。そもそも、あそこ迷子になる程大きくないしね…。とりあえず、何か役に立てばって感じで。

トリイを含めた大学で仲良くなった一人、篠塚<sup>しのづか</sup>真衣<sup>まゐ</sup>からの情報だ。これは非常に有用だ。——だが、真衣の言うように、迷うほどの広さはない。もう一つのDMを開く。

オカルト掲示板でよくペンギン鳥 (@penguin\_ha\_tori) ちゃんとお話しさせて貰ってる者です。昨夜、ペンギン鳥さんからDMで「小さい山じゃ迷えない、どうすれば迷えるかなあ」って言うちょっと不思議な相談貰って。マヨイガアプリのことだとは思ったんですけど、よく分からなくて。一応、と思ってメッセージしました。

二つのDMの情報から、トリイはまず大学所有の小さな山に入り、迷えず——そりやそりや——別の方法を探そうとしていた。だが思い当たらず、オカルトを信じる知り合いに色々聞いて回ったのだろう。ぼくに相談が来なかったのは、止められるからだと言うことも容易に想像がつく。

(全く、心配するのはいつだってぼくなんだぞ?)

そう思うも、トリイの天真爛漫かつ高い行動力に憧れるものがあるのだった。

さて、ゆら先輩に依頼されたことの一つ、トリイの消えた範囲と時間は大まかに解っ

た。次はマヨイガアプリそのものについてのリプライを拾ってみよう。  
ぼくは再度SNSのリプライを見直す。

@karinto\_77

@mike\_2shippo アプリをインストールすると地図アプリみたいなのが開くって聞いたな。何も入力していないのに、自分の今いる場所から目的地がプロットされてるんだって。それを辿ると異界に行けるらしいよ。

@hidden\_moon\_xx

@mike\_2shippo オカルト系動画配信者がなんか検証してた。  
見ろよ。どうですか？

<https://www.xxxxxx.com/watch?v=xxxxxxxxxxxxxxxx>

@math\_freak77

@mike\_2shippo 異界から帰るには、誰かに見つけて貰わないとダメなんだって。  
異界への扉は現世からしか開けないってことなのかな？

こちら辺は、ぼくも知っている情報だ。動画の話は知らなかったけれど。あとで見てみよう。そして、いくつか気になる情報もある。ぼくが知っているマヨイガアプリの性質とはちよつと違うみたいだ。

@knitting\_cat8

@mike\_2shippo アプリのインストール方法についてだけど、道に迷って地図アプリを開こうとしたら、なぜかインストールされてたんだって。逆に、それを辿って家に帰れたって聞いたことあるよ。

@takoyaki\_star

@knitting\_cat8 @mike\_2shippo 私も！ いつの間にかマヨイガってアプリがインストールされてて、でも気持ち悪くって開く前に消しちゃった。消さなければ何か役に立てたかも。ごめんね！

この二つの投稿は、アプリはいつの間にかインストールされている、と言うものだ。ぼくの知っているマヨイガアプリは自発的にアプリをインストールして効力を発揮するものだったが、この二人では、アプリが、つまり怪異が積極的に人に寄って来ているように思える。

(一旦、こんなものかな)

ぼくは学生ラウンジの時計を見る。思った以上に時間が過ぎていて、外も暗くなって来ている。こんな逢魔時に、トリイは一人迷おうと躍起になっていたのだろうか。

幾らあいつでも、マヨイガで一人では寂しいだろう。

——とは思いますが、案外楽しんでいるかも知れない。

ぼくは先日 of 民俗学 of 講義を思い出した。

マヨイガ——迷い家とは柳田邦男の遠野物語に登場するのを初め、東北地方に多くある伝承の一つである。遠野物語で語られるのは、以下のようなものだ。山中で迷っていると山中に似つかわしくない豊かな家が現れる。そこには非常に親切な人々が住んでいる。そこから何か一つを持って帰ると幸運を得られる——。また、別の伝承ではそもそも関わると悪いことが起こるといふ話もある。まあ、こちら辺はよくある伝承や昔話つてやつで、さらには色んな地方に色んなパターンがある。このマヨイガアプリも野放しにしておけばきつともつと沢山の派生が生まれるのだろう。

マヨイガは昔から迷子とか失踪事件とかの原因とされていることから解る通り、今回も家出や失踪、行方不明の人たちはこのアプリのせいなんだろうと実しやかに語られるのだ。

もし、マヨイガアプリで行ける迷い家が遠野物語の迷い家であれば、トリイはそこの生活を楽しんでるのだろう。ゲゲゲの鬼太郎の物語だったら、生気とか吸われてそうだけだ。

なんてトリイを心配しているのか何なのか自分でも分からなくなった頃、ゆら先輩から着信が入った。慌てて通話ボタンを押す。

「はい、どうしました?」

話の内容は、ぼくのSNSの投稿を見たと言うことと、そのリプライの多さから大分情報

が集まってきたのではないかと思つて連絡をしたようだ。

ぼくはリプライとDMの内容から自分なりに精査して、トリイが昨日の夜に大学近くを彷徨っていたこと、そこから遠くは離れていないだろうこと、積極的に迷おうとしたことを伝える。

それを伝えると、ここまで情報が出揃えばトリイを助けることができるかも知れないとのことだった。

「ホントですか？」

ぼくは人目も憚らず叫んでしまった。

周りの目なんて気にしてられない。トリイを、この世界に戻すことができるのだから。

立ち上がり、民俗学研究室に行こうとすると、電話の向こうから制止される。

「……解りました。明日、ですね」

一刻も早くとは思うものの、矢張り準備があるらしく、明日の十三時に民俗学研究室に来てくれとのことだった。

「……はい、ああ、マヨイガアプリそのもの話ですね。そちらも、当初噂になっていた内容から少し変わり始めていました」

ぼくは手短かに収集した情報を伝えて、電話を切る。

トリイ……今頃何をしているのだろう。

翌日、ぼくは早々に大学の学食で食事を済ませて、ゆら先輩の居る民俗学研究室へと赴いた。少し早い時間だから失礼かも知れないと思いつつ、居ても立ってもいられなかったのだ。

「ヤアヤ、やつぱり早く来ちゃったね」

ぼくを迎えたのは、ゆら先輩と見知らぬ男性だった。夏なのに全身黒尽くめの怪しい人である。

「ええと……？」

ぼくが困惑するように、ゆら先輩に説明を求めると。

「彼は柳無瀬。理学部情報科学科の学生よ。ミケくんにとって学部違いの先輩ってかんじ。ほら、挨拶挨拶」

「初めまして」

初めましてなんだけれど、何故情報科学部の先輩がここに居るのだろうか？ そう言う

説明はしてくれない。なので、ぼくは挨拶をしつつ柳無瀬さんに困った視線を送る。貴方は何故ここに？ と。

「初めまして。コイツが怪異探偵なら、俺は探偵道具を作る黒幕みたいなモンだよ」

キヒヒと独特な笑い方をして、柳無瀬さんは笑った。国民的推理漫画みたいな話だ。

「あつ、あのお守りとかを作ってくれた感じですか？」

ぼくたちが知っているゆら先輩の探偵道具と言えば、持たされているお守りくらいだ。

それを作ってくれた人なのだろうか。

「んーや、あれはコイツのモンだ」そう言つて柳無瀬さんは親指でゆら先輩を指す。「俺はそのお守りに込められた——なんつーんだ？ 呪具？ 念？ を増幅させるチップを作つたに過ぎない」

それはそれで凄いやと思うけれど。

ぼくが繁々とお守りを見ていると、「さて、私の方から説明するね」と、ゆら先輩はこれからぼくたちが実行することを説明するのだった。

「キミたちに持たせたお守りには、私が作つた呪具が入つてる。そしてこの柳無瀬が作つたチップの力を借りて、念力も電波も増幅している。呪具はキミたちを怪異から守つてくれるけれど、今回はこのお守りに込めた念を辿つてトリイくんを探す」

「辿ることってできるんですか？」

「ぼくはその問いは、当然想定されていた。」

「普通は、無理よ。だから柳無瀬が居るの」

ゆら先輩が柳無瀬さんに視線を送り、説明を求める。

「むかーしむかし、つつても民俗学の視点からは最近だけだ。きさらぎ駅つて言うのがあつてな。まあ流石に知つてると思うが、電車に乗つたら知らない間に知らない駅に着いた、そこは異界だつたつて言う話だ。有名掲示板でその異界にいるつて言うやつとやりとりをしたつて所から、新たな怪異として話題になつたな」

Case-1 マヨイガアプリ

## Case-1 Phase-B ヲロイガプリ

あの人はいつも民俗学研究室に居る。

そしてあの人はいつも達観したように物事を解決してくれる。

——まるで、探偵のように。

だから、講義を抜け出してすぐに、あの人を頼った。

「先輩！ ゆら先輩！」

帝都大学社会学部文化人類学科民俗学研究室。ぼくが所属する研究室には、フィールドワークを日常とする十時教授が在籍している。しかし教授は常に現地調査に出ており、実質的な対応は研究生の彼女が担当している。

「オヤオヤ、ミケくん久しぶりね。どうせトリイくんのことでしょう？」 彼女は達観したように微笑んで迎えてくれた。「まあ、座りなさい。そしていつものように缶コーヒーでもどう？」

につこりと笑う彼女を見て、少しだけ安心した。九十九ゆら——研究生として民俗学を研究する彼女は、不思議と人を落ち着かせる雰囲気を持っている。

研究室にはソファが置いてあり——来客用というよりは泊まり込みをする学生のベッド代わりようだ——そこにいつものように座る。

鳥居翔——トリイと呼ばれる親友は、同じ社会学部だが心理社会学科の学生だ。大学

に入つてすぐに仲良くなつたが、彼は微妙に厨二病が抜けておらず、都市伝説や怪異現象が大好きだ。自分を顧みず色んなことに首を突っ込んでいくので、よく怪異に巻き込まれる。ゆら先輩曰く「霊媒体質」とのことだが、本人は気にしていない様子で、むしろ楽しんでいようにも見える。

確かにトリイのことで研究室を訪ねることは多かつた。しかし今回は違う。

スマートフォンを握りしめる手に力が入る。講義中に見たメッセージ画面が、まだ頭から離れない。真衣の焦りに満ちたメッセージ、そして瑛二の最後の投稿――。

「いえ、今回は……」言葉が詰まる。「学科の仲間のことなんです」

「ふむ」ゆらは興味深そうに顔を上げた。

「どんな話？」

「マヨイガアブリって……ご存知ですか？」

その言葉に、ゆら先輩の手が止まった。机の上には、偶然にもデジタルデバイスに関する民俗学的考察の資料が広げられている。

「詳しく聞かせて」ゆら先輩の声は、いつもより少し低くなっていた。  
真衣とのやり取りを思い出す――。



夏の日差しが教室のカーテン越しに差し込み、暑さを和らげるはずのエアコンの風も、どこか生ぬるく感じる。もうすぐ講義が終わる。時計を見ると、残りはおと十数分。教授は黒板いっぱい文字を書き込んでいる。

机の上に置いたスマートフォンが小さく震えた。画面を覗くと、真衣からのメッセージ通知が目に入る。篠塚真衣——彼女は同じ社会学部で別の学科に所属していて、年齢もぼくや瑛二と同じ。しつかり者で誰とでも分け隔てなく話せるタイプだ。その面倒見の良さに助けられた学生は多いし、ぼくもお世話になっている。

@Maichan\_4U

瑛二のこと、知ってる？

少し前から全然連絡取れなくて。。。

画面に浮かんだメッセージを読んで、ぼくは小さく首をかしげた。葛城瑛二——文化人類学科の同級生で、いつも講義中は後ろの席でひっそりノートを取っている、いわゆるおとなしいタイプの男子学生だ。とはいえ、ここ数日見かけていないからって、大学生なんて、ちょっと体調崩せば簡単に休むことだってあるし、バイトやサークルとの兼ね合いで忙しいだけかもしれない。

でも、真衣とぼくと瑛二、それに別学科のトリイを加えた四人でよく図書館で勉強会を

していた仲だったし、真衣は特に彼と研究テーマが合って意気投合していた。そして、彼女がここまで心配するということは、何かよっぽどの事情があるのだろう——多分、瑛二のことが好きなんだろう。

教授がまだ黒板に文字を書き連ねているのを横目で見ながら、一瞬ためらいつつも、ぼくはメッセージの返信作成画面を開いた。

@mike\_2shippo

最後に会ったの、いつ？

すると、間髪入れずに真衣から返事が返ってくる。いつもは落ち着いた彼女のことを考えると、これほど即答してくるのは珍しい。スマートフォンの振動が、ちよつと不穏な気持ちを増幅させる。

@Maichan\_4U

先週水曜日。

前に瑛二がスマホで何か変なアプリの話してたの覚えてる？

なんかマヨイガ？に連れてってくれるみたいな……

それを使って失踪したっていう書き込みをネットで見ちゃって、心配で……

マヨイガアプリ——。なんとも胡散臭い名前だ。最近、噂で耳にするようになった、都市伝説じみたアプリの話。不思議な場所へと誘われるとか、そこに行ったら二度と戻ってこれないとか……。まるでホラー映画の宣伝文句みたいだ。正直なところ、最初に聞いたときは「またトリイの好きそうなネタだな」と思ったし、ぼく自身もどこか茶番めいた作り話だとバカにしていた。

——そもそも、二度と戻れない”なら、その話を誰から聞いたっていうんだ？戻ってこれないんだったら、体験談なんて出回るわけがない。

『友達の友達が消えた』だとか、『あの子、アレ使ったらしいよ』なんて、どれも伝聞の形でしか語られない。曖昧な語尾と、どこかリアリティに欠けるエピソード。

それでも、気がつけば噂はじわじわと広がり、まるで霧のように大学中に漂っている。けれど、真衣が不安がるそぶりを見せると、不思議とぼくの胸にも微かなざわつきが生まれる。彼女がこんなメッセージを送ってくるなんて、やっぱり普通の話じゃないのかも。

無意識にスマホを握りしめ、画面を叩く指先に力がこもる。

@mike\_2shippo

瑛一、まやか本当にDLしたのか？

なんか怪しい噂だったけど……

その問いを送った瞬間、なぜこんなに急いているんだろう、と自分でも思う。普段なら「何言ってるの、くだらない」程度で流してしまおう話のはずだ。それがここまで気になって仕方ないのは、やはり真衣の様子がただならないからだろう。

ところが今度は返信が来るまでに少し間が空いた。ぎりぎりになって講義室に入ってくる学生の気配や、まだ続いている教授の説明が、どれも遠くで鳴っているようにしか感じられない。

指先で机をコツコツと叩きながら、なんだか落ち着かない。まさか瑛二が本当にトラブルに巻き込まれているのか？ いや、そんな非現実的な——と思う一方で、真衣のいつにない焦りがどうしても気になってしまう。

やがて、スマホが震え、画面に新たな通知が表示された。

@Maichan\_4U

うん……

「マヨイガアプリがあれば全部変わる」って言ったの

私、あのとき止めなきゃだった……

短い文章の中にじむ、真衣らしからぬ後悔の色。彼女はいつも明るく率先して行動し、誰かが問題を抱えていれば真っ先に助けるようなタイプだ。そんな真衣が「止めなきゃだった」と自分を責めるなんて、明らかに異常事態だ。

だんだんと心拍数が増えるのを感じながら、ぼくは瑛二のアカウントを検索してタイムラインを遡る。まずは彼の投稿を直接見たほうが早いかもしれない。深夜にアプリを起動して、何かトラブルでも起こしたのだろうか。

教室の空気は相変わらず生ぬるいまま。けれど、ぼくの意識はもう教授の声を追えていない。

@nagisaеiji\_lab

変な噂のアプリ見つけた。

「マヨイガアプリ」ってやつ。

なんか深夜に起動するとヤバいことが起こるとか……

正直、ただの都市伝説かな。ちょっと試してみたくはあるけど。

最初の投稿を読む。軽いノリで書かれている文章。けれど、その行間に、どこか妙な引っかかりがある。興味本位に見せかけたその言葉の裏に、何かを誤魔化そうとしているような、わずかな逡巡が滲んでいるような気がした。

タイムラインをさらに遡る。スクロールしていく指先に、少し汗が滲む。

@nagisaefiji\_lab

気になるから調べてみたら、体験談っぽいのが結構あった。  
正直バカバカしい……けど、興味はある。  
このまま何もしないのもつまらないしな。

@nagisaefiji\_lab

……入れちゃった。  
深夜零時に起動すると何か起きるらしいけど……本当かな。  
まあ、たかがアプリだよな。

@nagisaefiji\_lab

最近、寝ても変な夢ばかり見る。  
アプリのせい？ いや、気にしすぎかな……  
けど、ほんとに世界の歪みみたいなものを感じるんだ。  
誰に話しても笑われるけど。

@nagisaеiji\_lab

……どうしてか分からないけど、涙が止まらない。

誰にも理解されないんだろうな。

自分で選んだはずなのに……これはやっぱり間違い？

もう引き返せない。

ごめん……何書いてるんだろ、俺……。

@nagisaеiji\_lab

世界がおかしいなら、自分が行くしか……。けど、`helloworld$/:3r.54_か`  
`#: [null]&&…… [ERROR 0x8F2] <システム異常> #6502………`

最後の投稿には明らかに異常な文字列やエラーメッセージのようなものが混ざり、途切れたまま終わっている。普通に考えれば、スマホの不具合とか一時的なバグかもしれない。だけど、真衣の言葉や彼の行方不明、そして都市伝説じみたマヨイガアプリの噂と全部が繋がってくると、急に現実感をもって迫ってくる。

「……なんで、こんなことに……」

思わず小さく呟いた。少し前までは勉強会で顔を合わせていたはずの瑛二。普段は控えめで、アプリを試すなんてことを軽々しくするタイプには見えない。

それでも、スマホの画面に映る投稿文だけは真実を突きつけていた。何かに惹かれてしまった彼の姿が、伝わってくる。最初は「試してみたくはある」と言っていたくらい軽い興味だったのかもしれない。けれど、最終投稿を境に、彼は文字通り姿を消した。

悪い冗談であってほしいという思いと、いや、これは本当にまずいことなんじゃないかという疑念。その二つがぐちゃぐちゃに混ざり合う。

ぼくはもう一度、真衣とのメッセージを確認しようとスマホの画面を切り替えた。

彼女があのととき止められなかったと悔やんでいるのなら、瑛二の様子は想像以上に深刻だったのかもしれない。もしかしたら、ぼくももつと早く気づいてやるべきだったのではないか。そんな後悔ともいえない思いが胸を締めつける。

気がつくのと、教授の話はすでに講義のまとめに入っていたらしい。周囲の学生たちは、ノートを閉じたり退出の準備をしたりと、いつもの風景を繰り返している。

だけど、ぼくの視界はすでにそれらを捉えていない。何か恐ろしい渦に巻き込まれるような感覚がじわじわと込み上げてきて、どうしても振り払えない。

「瑛二……」

小さくその名前を口にする。たかがアプリ、されどアプリ——都市伝説だと笑い飛ばせなくなつた今、ぼくは内心のざわめきをどう抑えればいいのかわからなかった。少なくとも、真衣と連絡を取り合いながら何か手段を考えなければいけない。ぼくは急いでカバンの中からノートPCを取り出す。少しでも情報を集める手がかりが見つかるかもしれない

い。

投稿画面を開く。深く息を吐いてから、慎重に言葉を選ぶ。

@mike\_2shippo

【拡散希望】友人が行方不明で連絡が取れなくなっています。最後の目撃は先週水曜日。スマートフォンで「マヨイガアプリ」という不審なアプリについて話していたのが最後の情報です。アプリに関する情報をお持ちの方はDMください。#拡散希望  
#行方不明

投稿ボタンを押した瞬間から、胃が重くなる。すぐに反応が返ってきた。

『マヨイガアプリってあの都市伝説？さすがに作り話でしょ』

『最近よく見かけるやつだ。なんかのプロモーション？』

『これで五人目か。みんな同じような展開だよな』

『拡散するほどの話？警察に任せれば？』

次々と届くコメントに、深く息を吐く。どれも薄っぺらくて、肝心なことには誰も触れていない。やっぱりコメント欄なんかじゃ、本当の情報は入ってこない。

ただの好奇心か、冷笑か。そんな言葉ばかりが画面に積み重なっていく。ぼくは無意識のうちにポケットの中を探った。指先に触れた布地の感触に、少しだけ落ち着きを取り戻す。

前にトリイが色々な事件に巻き込まれた時、結局は警察には相談できなかつた。あの時は先輩が解決してくれた。ポケットの古い布のお守りに触れるたび、あの時のことを思い出す。でも今回は違う。瑛二の最後の投稿を見つめながら、思考は加速していく。

席を立とうとすると、隣の友人が小声で声を掛けてきた。

「おい、ミケ。どうしたんだよ？」

「……ごめん、ちよつと出る」

震える声で答え、急いでノートをまとめてかばんに押し込む。

友人の目が驚きと戸惑いを浮かべているのが分かる。だけど、今はそれどころではない。教壇の方をちらりと見ると、教授がこちらに一瞬目をやったが、特に咎める様子はなかつた。勝手な行動をしているという後ろめたさが、一瞬心をかすめた。

廊下に出た瞬間、講義室内の冷房から解放された湿気が肌にまとわりつく。真夏特有の蒸し暑さが、酸欠状態の体を一気に包むようだった。スマートフォンを握りしめた手のひらが、汗でじつとりとしている。

ぼくは震える指でスマートフォンを握りしめた。警察に電話する——その考えが浮かぶだけで、心臓が早鐘を打つ。でも、このまま何もしないわけにはいかない。深く息を吐

き、警察の緊急番号ではなく、地域の警察署の番号を検索する。受話器を耳に当てる手が、微かに震えていた。一声、二声、コール音が鳴る。喉が乾く。やがて、若い男性警官の声が聞こえてきた。

「はい、帝都警察署です」

「あ、あの……」

声が掠れる。慌てて喉を軽く咳払いした。

「友人が……行方不明になって……」

「いつからですか？」

事務的な声音に、更に緊張が高まる。

「先週水曜日から連絡が取れなくて……」

一つ一つの言葉を選びながら話す。変に思われたくない。でも、全てを正確に伝えなければ。その葛藤の中で、声が段々と小さくなっていく。

「電話はつながりますか？何か連絡手段は？」

「投稿も途切れていて、電話もつながらないんです。その、マヨイガアプリという……」

その言葉を口にした瞬間、案の定警官の声のトーンが変わった。

「ああ、例の都市伝説ですね」

少し呆れたような声。

「最近、よく同じような通報があるんですよ。大抵はプチ家出って言うんですかね？そ

んな感じですぐ戻ってきてるんです」

「でも……」

反論しようとして、言葉が詰まる。

「まだ数日ですし、大学生なら友達の家泊まってるかもしれません。もう少し様子を見てから、ご家族とも連絡を取っていただいて、それでも何かわかったり、事件性があると思われることがあれば、また連絡をください。こちらとしては、現段階で動けることは限られていますから」

電話を切った後、ぼくは深いため息をつく。やはり。警察に相談したところで、*「マヨイガアブリ」*なんて胡散臭い話を、誰が真剣に取り合ってくれるだろう。しかし、このまま放っておくわけにはいかない。だけど、自分には何ができる？

そう考えていた時、ふと思いついた。古い校舎の四階。人気がない廊下の突き当たり。あの先輩なら……少なくとも、この状況を理解してくれるかもしれない。資料をかばんに詰め込みながら、決意を固める。民俗学研究室。あの人なら、きつと――。



ぼくは話をひととおり終えると、ゆら先輩は研究室の窓の外に視線をやった。研究室の窓から差し込む午後の光が、古い蔵書の列を淡く照らしていた。ゆら先輩の横顔が光に

縁取られて、いつもより神秘的に見える。民俗学の研究室特有の、古書と紙の香りが漂っている。

「あの……」

ぼくは声を潜めるように切り出した。

「これを……九十九探偵への依頼という形で、お願いできないでしょうか」

そう、*「怪異探偵」*九十九 ゆら。表向きは民俗学研究室の研究生だが、怪異に関する事件を扱う探偵としての顔も持っている。その存在は一般的にはあまり知られていないが、民俗学関係の大学生の間では密かな評判になっていた。特に、怪異に巻き込まれやすい学生たちにとって、彼女は頼りになる存在だった。

ゆら先輩の報酬は意外にも可愛らしいもので、大学近くのカフェでのパフェを奢ることだったり、古書店での買い物に付き添うことだったり。ゆら先輩の女性らしい一面を垣間見せる瞬間でもある。ぼくも、トリイの事件でお世話になった時は、メープルシロップたつぷりのパンケーキで支払った。

「オヤオヤ」 ゆら先輩は楽しそうに微笑んだ。

「都市伝説として、とても興味深い特徴があるわね。特に現代的な要素が際立ってる」

「現代的な……要素ですか？」

「そうね」

ゆら先輩は軽やかに立ち上がり、古い書架へと歩み寄った。

「昔からマヨイガ、つまり迷い家という概念はずっと存在してたの。望んだ者だけが辿り着ける不思議な家。そして近年——そのマヨイガを内包する異界“マヨイガ空間”までセツトで語られるの。現実と違う位相にぼっかり開いたポケットデイメンションみたいなものね。でも——」

ゆら先輩は背伸びをして、上段の古い和綴じ本に手を伸ばした。その仕草には、いつもの自然な愛らしさがある。

「そこから戻れるかどうかは、その人の“縁”次第」

ゆら先輩は目を輝かせながら、古書を大切そうに抱えた。

「運命的な要素として、すごく魅力的な部分だと思わない？そのアプリはその『縁』をデジタルに変換したのよ」

本を開きながら続ける。

「どうい……」

ぼくの問いかけに、ゆら先輩は視線を上げた。

「状況を聞くに、今回の件は現実世界とRootsの“境界”で起きているみたいね。最近、非公式の改造アプリがあちこちで出回っているでしょう？それが、今回の現象に強く関係しているはずよ」

Roots——ぼくたちの世代なら誰もが使っている、というより使わざるを得ない超巨大プラットフォーム。

でも正直、この「リアル」と「他」の世界の秩序を「Real and Otherworldly Order Transform System」なんて名称、ずいぶん厨二病じみていると思う。オンライン空間を「他の世界」と呼んでいるのだろうか。実際、リアルの生活とオンラインの活動は切り離せないくらい密接だし、そこをまとめて変える事のできる超巨大SNSと言いたいのかもしれないけど……。だったら素直に「Online」でいいものを、わざわざ「Otherworldly」なんて言葉を使うあたり、命名者は相当こだわってるのかもしれない。

タイムラインでの近況報告から、友達とのメッセージ、授業のグループ、写真の共有、位置情報まで。Rootsストアには毎日のように新しいアプリがリリースされ、チャットボット、スケジュール管理、学習支援、ゲーム、写真のフィルター加工など、何でもできてしまう。公式アプリだけでも数え切れないのに、非公式のものまで含めたら把握しきれないほどだ。

ぼくたちは、まるで日常の延長線上にあるかのようにRootsに投稿し、「いいね」を送り、コメントを残し、メッセージをやり取りしている。そのすべての日常が、嫌でもここに投影されてしまうというわけだ。

「私たちの存在自体が、Rootsを通じてデジタル空間に反映されているの」

ゆら先輩は古書のページをめくりながら、静かに説明を続ける。

「現実とデジタル、その境界で私たちは生きている。そして時々、その境界が揺らぐ時がある」

その言葉に、ぼくは普段意識していなかったRootsの存在を改めて考えた。便利すぎて気づかなかつたけど、確かにその深層では一体何が起きているのだろう。瑛二は、その境界の揺らぎに巻き込まれてしまったのか。

その時、ぼくのポケットでスマートフォンが震えた。画面を確認すると、いつもの通知音。真衣からのメッセージだった。思わずゆら先輩の方を見ると、先輩は静かに頷いてくれた。

「ミケ、ごめん……さっきのことなんだけど」

こちらが挨拶をする間もなく飛び込んでくる真衣の声は、いつもより少し早口だ。

「私、瑛二と……あの、位置情報のグループ作って……。図書館の勉強会の時に便利かなって思ったから……。べ、別に深い意味はなくて……」

言葉が慌ただしくなる。瑛二への気持ちを隠そうとしているのが、あまりにも見え透いている。

「そうなんだ。何か新しい情報あった？」

ぼくは静かに尋ねた。いつもなら真衣のあたふたした様子に笑ってしまうところだけど、今は状況が違った。

「うん。最後の記録、すぐく変だったの……」

真衣の声が途切れる。

「……グループに追加していい？見て欲しいんだ」

ゆら先輩の方を見ると、先輩は興味深そうに耳を傾けている。その表情には、いつもの分析的な眼差しが浮かんでいた。

「真衣、今から共有して」

通話を切つてすぐ、位置情報共有グループに追加された通知が届く。三日前の記録を遡ってみると、その動きの不自然さにぼくは違和感を覚えた。

「ゆら先輩、これを」

スマートフォン画面をゆら先輩に見せる。

「瑛二の動き、最後の方が……」

画面には、明らかに異常な軌跡が記録されていた。午後七時まではキャンパス内を規則正しく移動していたのに、その後の動きは完全に破綻している。同じ場所を行ったり来たりしたかと思えば、突然大きく位置が飛ぶ。アプリの不具合にしては、あまりにも不規則すぎる。

「ふむ」ゆら先輩は画面を凝視する。その眼差しは、いつもの柔らかさを失っていた。先輩は深い思索に沈んだように、ゆつくりと古い本棚の前に立った。その姿勢には、いつもの軽やかさは感じられない。むしろ、これから直面する危険を予感させるような重みがあった。

研究室の空気が、微かに震える。ぼくは無意識のうちにポケットのお守りに触れている。古書の匂いが漂う中、ゆら先輩が書架から資料を取り出そうとした、その時。